

# 中世都市概念についての一考察

相澤 隆

歴史に関わる分野の中で、考察に当たってまず考察対象の厳密な概念規定を要求される分野は多くはないであろう。都市史の場合、研究するに当たってまず都市という概念をどのように規定するべきかという点は、実際に言及することは少ないにしても、つねに研究者は念頭においておかなければならない。

近年都市史研究が進み、その成立に至る過程がとりわけ考古学的知見を取り込みながら明らかになるにつれて、都市という概念の輪郭がしだいにほやけてきており、あらためてある集落がどのような条件で都市という名を冠することができるのかが、問われるようになってきている。

どの集落を都市と定義づけるかという点に関しては、たとえばドイツや中部ヨーロッパの研究者のとった立場はある意味でたいへん実用的なものであった。それは史料において「都市」と呼ばれているものをとりあえず都市ととらえて、それを研究対象にしようとする立場であった。中世の前期にはさまざまな名前で呼ばれ、それゆえそれらの呼称をつけられた集落を都市とすべきか、あるいは前都市的 *vorstädtisch* な集落とすべきかという点についてはさまざまな議論があった。しかし中世の12世紀以降、現在の都市 *Stadt* の古いかたちであり、元來は集落を指すにすぎなかった *stat* が「都市」を指示する呼称として慣用されるようになって以降、その名で示された集落をすべて都市の範疇に含めようという立場である。

中部ヨーロッパだけで、そのような「都市」は4,5千にもおよぶが、それらを一括して都市研究の対象とすることで、当時において「都市」という集落がどのような条件の下に形成され、どのような資格でその呼称をえたのかを探ることは可能である。ただしそれは我々が都市としてイメージするものとはあまりにも隔たったものまでも考察に含めざるをえなくなるであろう。実際それらの都市のほとんどは13世紀以降に激増した、人口数が2000人にも満たない小集落であり、とりわけせいぜい長さ百メートル程度の一本の街路の両側に建てられた家屋と、それを取り囲む城壁で構成された人口数百の、膨大な数の集落が「都市」の主要部分をなすことになる。それらの「都市」のほとんどは、周辺に農地をもつ農民と、彼らに日常の必需品を供給する小商人からなる農耕市民都市の性格をもつ。

こうした立場に対して「都市」という概念を特定の指標を用いてより厳密に定義する研究方法も存在した。そのもっとも古い試みは、法的な意味での都市、すなわち都市法をもって周辺の封建的世界から法的に隔絶した集落を都市と定義づけることであった。この法制史的なアプローチは19世紀以降に隆盛を極め、第2次世界大戦前まで大きな影響力をもっていた。これに対して都市概念を定義する際に社会経済史的な側面をより重視すべきだという考え方が、19世紀末の歴史経済学派を中心とする研究の中から現れた。しかしこの考え方も都市経済が主導する経済の発展段階を中心に考察し、それにいたる発展過程には関心を払わなかったことや、法制史的なアプローチと同様、これも都市現象への一元的なアプローチであり、都市現象の歴史的多様性を犠牲にしたものではないかという批判が現れてきた。

こうした批判の背景には、都市概念をつくるに当たっては時代と地域の違いに応じてそれぞれ独自の特徴や特殊な要因を考慮に入れるべきだという考え方があった。たとえばヨーロッパの中世都市を考察するに当たっては宗教的な要因は除外できない必須のものであった。古代都市が衰退していった中世初期にあって、都市的な集落形態や人口、経済活動などが維持されたのは、何よりもこれら古代都市の多くが司教の在住する司教都市という性格をもつに至ったからに他ならない。これは古代ローマにおいてはキーウィタース *civitas* という用語が古代都市を中心とする行政単位に用いられたのに対して、中世にはこの語が司教都市に限定して使われるようになったという点に端的に表現される。近年、上ロートリンゲン地域の都市形成を検討した共同研究では、時代ごとの都市分布を地図上に描き込む作業を行っているが、1100年の都市分布では重要な中世都市のほとんどは司教都市であり、世俗領主の支配する都市はミューズ川沿いのユイ Huy やディナン Dinant などごく少数しかなく、しかもそれらも司教都市と比較すると、小規模な集落にすぎなかった。さらにこの共同研究はその後の時代にあっても、世俗的な都市の中から司教都市や修道院都市と肩を並べる集落が現れるまでには時間がかかり、しかもその数が限られていたことが、明らかにされている。

ヨーロッパ中世都市の概念規定に当たって考慮すべきもう一つの重要な要素が、都市が城塞であるという点である。古代末期から民族移動期にかけて、先に述べた司教都市を表す *civitas* という言葉が、城塞を有する集落という意味をも有していたことがトゥールのグレゴリウスの「フランク史」の記述から明らかになっている。また中世都市の形成にとって大きな意味をもっていた事象が、ライン・ロワール川間地域に多く見られる地誌的二元性 *topographischer Dualismus*、すなわち支配の拠点である城塞集落（フランス語では「シテ」）とそれに近在する商人定住地（フランス語では「ブル」、史料では *burgus*, *portus*, *suburbium* など）で表記される）が、第二次民族大移動期の異民族の侵入によって集落の存続にとって危機的な事態を経験した後、一つの城壁によって統合されたことであった。そしてこれ以降、都市の拡大は、都市の外に広がる城外街を、都市城壁

の拡張をつうじて、都市壁内へ包摂することによってもたらされた。このようにほとんどの中世都市にとって城壁が死活的に重要なものであった以上、中世都市の概念に城塞としての性格を加えることは当然必要なことである。

これに加えて中世都市の中でも時代ごとに異なるタイプの都市が形成されていったことにも留意すべきである。中部ドイツで1150年頃以前に成立した都市は、どこも立地条件の良い地点に形成され、その後順調に成長していったのに対して、それ以後の都市は時代を経るごとに条件の悪い立地につくられるようになり、それらは成立初期にあった小規模な集落形態から発達する可能性がほとんど閉じられていた。したがって1150年以降は小都市の時代であり、さらに1250年以降は極小都市、1350年以降は矮小都市というように成立する都市の規模で時代を区分する研究もおこなわれた。

このような中世都市の多様なあり方を考慮しつつ、都市概念を都市のもっていた機能に即して定義づけようという試みも最近行われている。その際、都市のもつ機能としてとくに重視されるのが、その中心地としての機能である。この機能を中心にして中世都市を考えていこうという傾向はすでに1970年代頃から現れてきた。第二次大戦前のドイツでクリスターラーによって提唱され、戦後はアメリカでこの理論が発展した中心地という考え方は、現代における都市を対象とした緻密な、数量的分析も交えた研究であり、そのままのかたちで中世に適用できるわけではない。しかし、上で見たような都市のさまざまな側面を中心地としての都市という観点にたって統合的に考察することが可能である。たとえば法的には都市は農村とは区別された法圏をなしているとはいえ、都市相互の関係においては、その都市法が他の都市の模範となり、参照されたり、上級の審級として機能したりする都市(母都市)が存在しており、法的な序列が形成された。経済や宗教、軍事などの観点からも都市を中心地として考察することは可能であり、したがって都市を中心地機能の束としてとらえることが可能なのである。

ここで、都市の多様性と中心地としての機能に着目した概念規定として提唱された、フェルディナント・オープルの中世都市概念を紹介しておこう。オープルによれば中世都市とは、「時間的空間的にそれぞれ異なる形態を取って存在し、経済的・法的・社会的・地誌的な見地において、内部が細分化され、組織化された構造と、中心的諸機能を有する、非農業的大集落ないし、かなり大きな集落である。」(F. Opll, *Das Werden der mittelalterlichen Stadt*. HZ Bd.280, 2005, S.264)

最後に、こうした研究上の発展にもかかわらず、都市概念の構築に当たって研究者の問題意識が問われることがあることも付記しておきたい。1990年代以降ようやく歴史学においても議論されるようになったマックス・ウェーバーの著作、とりわけ彼の「都市の類型学」で彼が提唱した西洋都市の概念規定は、今から100年も遡るものであり、現在の研究状況から見れば時代的制約や他の諸地域の都市への理解の薄さなど問題とすべき点も少なくない。しかし西洋の近代世界の成立に対する関心から中世都市を展望し、

その団体としての性格や合議制にもとづく自治の形態に高い評価を与えた彼の議論は、現代においてもけっして古びたものではない。もちろん近代合理性との連続性という見地に立った場合、中世都市の制度や社会と直接結びつくものを見出すことは難しいし、19世紀の近代市民社会の形成に当たって、排除されるべき要素（たとえばツンフト制度）が多々あったことも疑いえない。また近年の封建都市論に見出されるように、中近世という時代的な条件の中で都市を見ていく必要があることもたしかである。しかし19世紀ドイツにおけるドイツの自由主義的な主張に理念的に大きな影響を与えたのが、中世都市の自治や自由であったことも近年研究されてきており、また近代ドイツの新たな地方自治制度において中世都市が誇るべき過去として具体的な影響を都市に及ぼしたことも明らかである。

こうしたことも踏まえれば、都市を周辺地域との関連の中で位置付けようとする議論と並行して中世都市の独自の性格をさらに究めることは、今後も重要な課題といえるであろう。